

1つの目標に向かって一致団結する米国女性のパワーはすごい。1人1人が問題意識をはっきりと持ち、努力している。いつか世界中の女性と一緒に、国際的な女性スポーツ会議を開けるよう、私たち日本女性も頑張らなくては。

「あー、着いたぁ……」重い荷物を投げ出すと同時に、言葉にならない声が出た。部屋の時計に目をやると、あと数分で午後10時になる。6月18日の午前10時に成田を出発し、実に26時間の旅だった。きれいに整えられたベッドの上には「インディアナポリスへようこそ」と書かれたカードが1枚。あー、本当にインディアナポリスにやって来たのだ。

1987年6月19日から21日の3日間、米国の中東部に位置するインディアナ州の州都、インディアナポリスで開催された第2回全米女性スポーツ会議（ニューアジェンダII）には、全米各地から約3000人が参加していた。その顔ぶれは指導者、研究者、現役の選手など、スポーツに関わるあらゆる分野にわたっている。今回のテーマは「少女のスポーツ参加」である。WSF（米国女性スポーツ財団）、GWS（全米女子スポーツ協会）そしてGCA（米国女子クラブ）の3団体が主催し、どのようにして少女たちにスポーツへの参加を促すか、ということについて話し合われた。

3日間の内容は、心理学、生理学、

社会学といった見地からの分科会フィルム上映、各スポーツ団体の資料展示、デモンストレーションなど盛りだくさんだった。中でも分科会は、1日7〜12講座、3日間で32もの講座が開かれた。事前に分科会のプログラムが配られ、その中から自分の興味のあるもの



▲会場のインディアナ・コンベンションセンター

を選び、参加できるようにになっている。講師は、教育学博士、医学博士といった、その分野の専門家ばかりだ。そしてすべて女性。日本ではこのような会議を、私はまだ見たことがない。さらに私を驚かせたのは、特別ゲストとして参加した、ロサンゼルスオリンピックの金メダリストたちのスピーチぶりだった。自転車競技のコーニー・カーベ

ンター・フィニー、体操のジュリアン・マクナマラ、バスケットボールのリネッティ・ウッダード。どのスピーチをとっても、自信をもって自分の意見を述べ主張する。時にはユーモアを交じえながら、聴衆を引き込んでいくのだ。欧米では小さい頃からはっきり自己主張をするように教育されるとはいえ、300人も聴衆の前で、きちんと自分の考えを発表できるということは、やはりすばらしいことだ。

デモンストレーションの1つ、ジョギングに参加した時にはこんなことがあった。一緒に走っていたWSFのスタッフの1人が、すぐ横のグラウンドで練習をしていたソフトボールチームを指さして、「彼女たちのユニフォーム、見覚えがある」と言うのだ。近くへ行ってみると、試合のためにシカゴから来ているという「インディアナポリスまでの旅費を、WSFから援助してもらった」ということだった。彼女は事務局で書類の整理をしている時に目にしたユニフォームを覚えていたのだ。うーん、羨しい。WSF、Japanも、いつか資金の豊かな女子チームを援助するような活動が出来る

ようになってほしい。

今回の会議の参加者は99%が女性であったが、男性にも、もっと参加してほしいと思う。女性スポーツの発展のために女性自身が努力することはもちろんだが、男性の理解も必要不可欠である。お互いが各々の活動の意味を認め、理解した時に、真の女性スポーツの発展があると思う。ニューアジェンダの開催にはこんな思いも込められているのではないだろうか。

日本からこの会議に参加した私は、驚きとため息の連続だった。日本でこの様な女性スポーツ会議を開催できるのはいつのことだろうか。しかし、会議も無事終わろうという時、WSFのスタッフがこんなことを言っていた。「私たちも初めからの様な会議が出来た訳ではないのです。ゼロから出発し、一歩ずつ努力してきた結果が今日という日になったのです。驚きとため息だけでは会議は開けないのだ。この言葉を聞くことができただけでも、はるばるインディアナポリスまで来た甲斐があったと思っている。」

へたかはしあきこWSF Japan 役員、日本女子競泳部トレーナー